

特集ワイド

参院選、私の争点は…

毎日新聞 2016年6月22日

そう単純な話なのだろうか。22日公示された参院選で、自民党が最大の争点を経済と位置付けたことである。シングルイシュー（単一の争点）で、この国の将来を語れるとは思えない。ならば政党間で論陣を張るべき争点は何か。有権者は判断材料をどう考えればいいのか。3人に聞いた。【藤原章生、庄司哲也】

多様性認めるか見極め タレント・エッセイスト、 小島慶子さん

单身でも家族と一緒にでも、働きながら安心して暮らすというシンプルなことが、なぜこんなに難しいのだろうか。そう感じている人が多いと思う。

私が政治に求めるのは、多様な生き方を可能にする制度づくり。例えば、病気や出産や介護で今までと同じように働けなくなった人が、絶望せずに暮らしていける制度が整っているのか。失業したら再就職のチャンスはあるのか。そうはなっていない。

親たちは子どもを保育所に入れるための「保活」に追われ、心身を擦り減らしている。保育士や介護士の報酬は低いままだ。「女性が輝く」「1億総活躍社会」とうたっても制度が不十分な限り、信用はできない。選挙では、政党の本気度を測りたい。憲法も重要なテーマだ。どのような国を目指すのか。

もう一つの争点は、政治の手法だ。昨年来の国会でのやり取りなどを見ていると、自分だけが正解を知っている、異論や反論は排斥して構わないという空気を感じる。「個人の意見なんか大した価値はない。権力者に任せて、ついてくればいいのか」と。

どの政党であれ、数を制して政権を手にしたら、数は及ばなかったが切実な人々の声をどうするか問われることになる。自分たちに投票しなかった有権者を忘れてはならない。多数派なのだから何をしてもいいと考える権力者に世の中を預けていいのか。

もしも自分が少数派の立場になっても安心して暮らせる社会を望むなら、ルールを無視するような強権的手法を許してはならない。この選挙を機に、その手法を考えてみるのも重要だ。

キーワードは多様性。個人を尊重し、さまざまな立場の人の声をどれだけくみ上げて政治に反映しようとしているのか。それを見極めて投票先を決めたい。

痛みを語る政治家に 経済学者 岩村充さん

安倍晋三首相自身が「加速か、後戻りか」と言っているように、アベノミクスへの評価が最大の争点だ。

政府と日銀が一体となってデフレ脱却に向けて進めてきた「異次元の金融緩和」は、「物価上昇率2%」という当初目標をいまだに達成していない。そもそもインフレが景気を良くするという考え方に疑問がある。しかも、物価上昇を目指す政府が今になって「消費税を2%引き上げると景気が悪くなる」と主張するのは、明らかな矛盾だ。世帯当たり所得も、円安による物価上昇によって実質ベースで消費税増税以前の2013年10月ごろから減り続けている。

日本の最大の課題は、財政再建をどう進めるかだ。日銀が巨額の国債を抱えているが、

償還時期も見通せない。首相の統治能力によって、投資家に「日本国債はリスクが少ない資産」と思わせているのかもしれない。だが、投資家心理が一気に冷え込み、大量の国債が売り浴びせられるリスクは強まっている。

先行きが不透明な中、再び注目されているのが田中角栄元首相だ。1970年代のオイルショック後の混乱期、政敵の福田赳夫氏を蔵相（現財務相）に起用したり、旗印の日本列島改造論を降ろしたりして経済危機を脱した。今、求められているのも、そのようなリーダーの決断だ。

過去3年半の失敗を今さら追及しても仕方がない。そうではなく、アベノミクスの問題点を正確に捉え、痛みを伴う代替案を国民に語ることでできる、勇気ある政治家を選ばなければならない。

どの政党ならばいい、という話ではない。与野党のどちら側にも、それができる人はいらる。行き掛かりにとらわれない決断力とリーダーシップを備えた政治家であるかどうか判断の基準だろう。

「平和」へ主権者の1票を 映画作家・大林宣彦さん

戦後、高度成長の中で壊されていく古里を守ろうとしてきた私は、文化的、感性的には「保守」だが、政治的には正反対。全く矛盾している。でも、私に限ったことではない。それは「敗戦」を「終戦」という言葉に置き換え、「平和」の意味をあいまいにしてきた戦後日本の矛盾だ。

敗戦時、私は7歳。軍国少年だったので、その時には死も覚悟した。でも、負けた国であるがゆえに憲法9条を持ち得た。それは奇跡だと受け止めている。選挙では改憲か否かが重要な争点の一つとなるだろう。ならば、敗戦後の「平和」の成り立ちを皆が真剣に考えるべきではないか。

9条には「他国が武力で攻撃してきたらどうするのか」という現実論が常に突き付けられ、私もいろいろ考えてきた。

2010年、心臓にペースメーカーを埋める手術をした時、語呂合わせで気がついたことがある。西部劇の代名詞とも言われる銃は「ペースメーカー」という別名でも知られている。銃弾によって平和を作るという意味だ。だが、現世界における奇跡の9条を持つ日本はやはり、敵を倒して作り出す平和ではなく、銃を持たない平和という理想こそ追求すべきではないか、と。丸腰のまま国を守っていくには毅然（きぜん）とした覚悟と勇気が必要だろうけれども。

先日、中高生が「私たちの未来は私たちが守る」という内容のビラを配っていた。新しき「戦前派」である彼らに具体策を尋ねると「選挙に行くこと」と返ってきた。さらに「政治に向き合わず、選挙に行かない大人は主権在民であることを行使していない」という鋭い指摘を受けた。

憲法を守り、主権者たるためには、今こそ目の前にある1票を大切に行使し、「平和」という夢を手繰り寄せようではないか。

■人物略歴

こじま・けいこ

1972年生まれ。学習院大卒。TBSを経て2010年に独立。14年より子どもの留学のため豪州パースに暮らす。近共著に「不自由な男たち」。＝中村藍撮影

■人物略歴

いわむら・みつる

1950年生まれ。東京大卒。日銀企画局などを経て98年から早稲田大大学院教授。近著は、仮想通貨と金融政策を論じた「中央銀行が終わる日」。＝藤原章生撮影

■人物略歴

おおばやし・のぶひこ

1938年生まれ。成城大中退。「転校生」「時をかける少女」「さびしんぼう」と故郷の広島・尾道を舞台にした3本の作品で注目を集めた。＝庄司哲也撮影

特集ワイド

この国はどこへ行こうとしているのか 試練の憲法

元最高裁判事・浜田邦夫さん

毎日新聞 2016年6月21日

沈黙と同調、暗闇への道

皇居の緑がまぶしい。梅雨の合間の、わずかな晴天である。

東京・日比谷。窓越しに緑を望むビルの一室で、長年の沈黙を破った元最高裁判事に尋ねた。なぜ今、政治について語り始めたのですか？

「もう黙ってられない。最高裁判事OBは、現役裁判官に影響を与えるような言動はすべきじゃない。これが暗黙のルールです。でも、現政権が民主社会の土台を崩そうとしている今、発言しないのは良心が許さなかった……」

安倍晋三政権を最初に公の場で批判したのは昨年7月9日。テレビ朝日「報道ステーション」のインタビューで、安全保障関連法を「違憲で（憲法が権力を縛る）立憲主義に反する」と断じた。この年の9月15日の参院公聴会では、憲法が禁じていたはずの集団的自衛権行使について、「限定的なら合憲」との「新解釈」を持ち出した安倍政権に「字義を操り、法文の意図とかけ離れたことを主張する『法匪（ほうひ）』（法を悪用する者）」と激しい言葉で怒りをぶつけた。

「10年前、『戦後レジームからの脱却』を掲げた第1次安倍政権が登場した時も、現憲法の枠組みを廃棄したいのか、と心配になりました。あの時は1年で退陣しましたが……」

そして今。再び政権の座を得た安倍首相の悲願が憲法改正である。「自民党の改憲草案を見てください。9条改正もそうですが、さらに深刻なのは首相周辺が必要性を吹聴する『緊急事態条項』です。内閣が法律と同等の政令をいくらかでも出せるし、望めば選挙もせず政権に居座れる。こんなひどい条文は明治憲法にもありません。他の条文でも国民を縛る義務規定を一気に増やした。悪法としか言いようがない」

でも現実はどうだろう。毎日新聞の6月の世論調査では、安倍政権の支持率は42%と高い。元判事は手元に目線を落とした。

「『強い者』に逆らわない、大勢に流されるのをよしとする風潮が広がっているのか……。法曹界にも沈黙する人がいますし」。存命する最高裁判事経験者のうち、他に安保法や自民

党改憲草案について、公に発言したのは那須弘平氏と山口繁元長官らごくわずからしい。

「暗黙のルールを固守しているのか、発言すれば自分や周囲の不利益になるとお考えなのか、定かじゃない。ただこんなご時世ですから、もっと発言する人が出てくる、と思っていました」

実際、安倍政権に異を唱えたある判事OBは浜田さんに「ひんしゆくを買っている」と漏らしたという。「ならば安倍首相を支持し、改憲運動の先頭に立つ元最高裁長官が問題にされないのはなぜでしょう」。安倍政権に近い保守系団体「日本会議」の三好達名名誉会長のことだ。

最高裁判事は弁護士、裁判官、外務省などの行政経験者、学識経験者の中から政権が選任する。政権の意に沿わない発言をすれば今後、出身の弁護士会や官公庁から判事が選ばれないのでは一。保身と言えればそれまでだが、それが杞憂（きゆう）とも言い切れない現実がすでにある。

「法案が憲法に反しないかを審査する内閣法制局長官を、自分の意に沿う憲法解釈をする人物に交代させたのが安倍首相です。『憲法の番人』たる最高裁人事で、同じことが起きない保証はないんです」

法曹界だけではない。企業も沈黙したままと見ている。

「私は判事になる前、弁護士として長年、企業法務を担当し、国際商取引の現場で現憲法がいかに日本企業を助けているかを肌で感じてきた。これが壊れれば企業の大きな不利益になるはずですが……」。どの国の戦争にも加担しないとうたった9条と憲法があるからこそ日本企業が好感を持たれ、海外進出に有利に働いてきたという。

「企業も安倍政権に気兼ねしているのでしょうか。でも考えてみてください。仕事や地位、家族を守るために沈黙し、保身に走ればどうなるか」。メディアを含め、みんなが口をつぐんだ結果、仕事や会社はおろか、国が事実上滅び、最愛の家族を失うことになったのは、ほんの70年前のことではなかったか。

終戦時は9歳。1945年のちょうど今ごろ、6月19日深夜に当時住んでいた静岡市が空襲に遭った。犠牲者1900人超。浜田少年も、上半身が吹き飛ばされた遺体を目にした。

多くの人が犠牲になった日本は戦後、民主主義の道を歩み始めたはずだ。でも、浜田さんの認識は違う。「米国暮らしや、海外企業とやりとりしているうちに気づきました。日本では自分の意見を持ち、意見の違いを認め合う本当の民主主義が育っていない、と」

例えば子どもへのアイスクリームの与え方にも違いが表れる。米国では、子どもはトッピングを自分で選ぶ。浜田さんの経験で言えば、日本は親が黙って買い与えることが多い。そもそも親や教師、大人に従うことが「良い子」とされ、独自の意見を持つことは歓迎されない。学校では、クラスの多数派に同調しないと「空気を読まない」「和を乱す」と言われる。

「それがそのまま大人の社会や組織につながる。私はそれがイヤで弁護士になったんですが、真偽はともかく、こんな話も伝わっています」

最高裁の小法廷は5人の判事の合議制だ。ある時、意見が2対2で割れ、意見を求められた最後の1人は「多数意見に従います」と繰り返した一という。

「目先の利益と保身に走り、同調して異を唱えない。外見はまだ民主国家の装いですが、中身は確実に全体主義国家に近づいています」。浜田さんが一呼吸置いた時、窓外で救急車のサイレンの音が高く、長く響いた。

愚問と知りつつ聞いてみた。社会の流れを変える処方箋はあるのだろうか。温和な目が、くわっと見開かれた。

「どんな社会で暮らしたいかを想像してください。自分の幸福を自分で決められる社会

か、個人より組織や国家が大切とされ、他人に人生を仕切られる社会か。大切なのは空気を読まず、自分の意見を持つこと。憲法を全く変えるなどは思いませんが、良いものは良い。やたら『対案を出せ』と言う人がいますが、良いものに『対案』はいりません」

元判事は「私の原点です」と言い添え、古い記念切手のシートのコピーを取り出した。現物は自宅にあるという。47年5月3日、憲法施行を記念して発行された。シートに憲法前文の一部とその英訳が刷られ、切手には国会議事堂をバックに、ひしと抱きあう母子が描かれた。当時、日比谷のこの辺りからはまだ、廃虚と焼け野原が望めた。

元判事と別れ、日比谷を歩いた。つかの間の晴天はすでに去り、空には重い雲が垂れこめていた。【吉井理記】＝「試練の憲法」は今回で終了します

■人物略歴

はまだ・くにお

1936年生まれ。東大法学部卒。59年に司法試験合格。弁護士として国際金融法務に携わる。第二東京弁護士会副会長などを経て2001～06年最高裁判事。現在は全国各地で憲法関連の講演活動を続ける。

特集ワイド

この国はどこへ行こうとしているのか 試練の 憲法 臨済宗相国寺派管長・有馬頼底さん

毎日新聞 2016年6月20日

9条、やっぱり宝ですわ

桜や紅葉の季節だけではない、しっとりした梅雨の京都も味がある。名刹（めいさつ）、相国寺にやってきた。さっきから臨済宗相国寺派管長の有馬頼底さんの戦争体験をうかがっていたら、袈裟（けさ）の袖からかわいらしい「ポケット憲法」を取り出した。雨上がりの庭にお経ならぬ憲法9条が響く。「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇または武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する……」。にこっとした老師、こう言った。「やっぱりよろしいなあ。宝ですわ」

お会いするのはかれこれ10年ぶり。2005年、日米首脳会談で来日した当時のブッシュ大統領と、小泉純一郎首相が金閣寺を訪れた時、その案内役を老師が務めたからだっ

た。「ブッシュさん、庭をずっとご覧になって、平和ですねとおっしゃった。そこで申し上げた。日本は平和かしらんが、世界が平和にならんとダメです、と。ブッシュさん、イエス、と大きくうなずいていた。イラクからすぐ引き揚げなさいとまでは言えなかったが、ニューヨーク・タイムズに私のことが出たらしい。よくぞ言ったとね。アハハ」

83歳の老師が平和憲法を宝と言い切るにはわけがある。1945年8月15日を大分県日田市で迎えた。旧制中学の1年、毎日が教練続き、その日は防空壕（ごう）を掘っていた。「小さな駅のそばでしたからな。便所に突き当たってしもうて大便がしみ出してきよったんですわ。そしたら、玉音放送や。私が小僧をしていた寺は兵隊の宿舎で、兵隊たちは日本は負けたと叫び出す。すると上官は、負けたとはなにごとだと殴る。でも、負けたというてはるでと兵隊は口答えし、しばらくすると、その上官が袋だたきにされて」。軍人

だった父は3年間、シベリアに抑留され、祖国に戻ったのもつかの間、わずか3カ月後に亡くなった。「廢人になり、筑後川の川辺でただ流れを見ているだけでした」

戦後、豊かになったはずのこの国を不安が覆う。先が見通せない。迷える現代人は教えを請おうと禅寺の門をたたく。「ほんま、いろんな方がね」。安倍晋三首相も？ 「ええ、お会いしました」。聞けば昨秋、フランスのバルス首相と銀閣寺を拝観した際、同行したらしい。老師は金閣寺、銀閣寺の住職でもある。「その昔、蛤御門（はまぐりごもん）の変の時、長州の人間がぎょうさん戦死しましてな。うちの寺の墓に葬っています。お盆には毎年、山口からお参りに来られてます。安倍さんも墓参りなさいと申し上げたら、黙ってしもうてね。まあ、憲法守れ、守れ、と口うるさい坊主のおる寺にはようこれんやろけどな」

なるほど、たまに東京の禅寺で座禅を組む安倍首相だが、こんこんと説教されるのは苦手に違いない。「銀閣寺でお目にかかった時、憲法は宝や、と言うたらよかったんやけどな。でもね、安倍さん、ほんまは分かったはるんですよ。憲法改正には国民投票が必要でしょ。ぼろ負けしますよ。それを知ったはるから、集団的自衛権の行使ができるように閣議決定で解釈を変えてしもうたんです。無理やりにね。憲法違反でしょ。詐欺みたいなもんです。結局、アメリカの言いなり、日本を戦争できる国にしてしもうた。どんどん軍備を拡張していき、政治家はお余りをちょうだいや」

あきれ果てたという口ぶりである。だが、幼い頃からやんちゃだった老師、寺にこもって禅問答に明け暮れてはいない。ポケット憲法をしのばせ、日本各地はむろん、世界を飛び回っている。「行っていないのは北極と南極くらいですわ。平和はお互いが話し合わないといかん。対話をせんと融和はうまれませんから。とりわけアジアの国とは仲ようしない。中国訪問はもう80回以上になるかな。国交のない北朝鮮にも2度、行きました。06年は開城にある朝鮮天台宗の開祖、義天ゆかりの靈通寺の落慶法要、昨年もそこで平和を願って法要してきました。政府ができなかったら民間でやればええと思います」

とはいえ、北朝鮮は核・ミサイル開発をやめようとしなない独裁国である。平壤でもずばっとモノ申されました？ 「もちろん。当局者に、あんたらテポドンを撃つとるんはなんや、と。アメリカとの対話がしたい、日本にめがけては撃ちません、と答えたから、途中で日本に落ちたらどないしてくれるんやと、怒って迫ったんです。こう言いよったなあ。いや、我が国の技術は優秀ですから、と。なんか幼稚ですわ。困ったもんやが、根気よく対話を続けて、雪が解けていけばええんかなと。彼らは本音では近くて近い国になりたいと思っているはずなんですからな」。どうせなら最高指導者にも説教してほしいが。

思えば、安倍首相は積極的平和主義を唱えるが、老師こそ真の平和主義者に見える。親交のあるブータンのワンチュク国王夫妻に「被爆アオギリ」の種を届けたことがある。広島原爆で焼かれながら再び芽吹いたアオギリが平和の象徴として、ブータンに根付き、核廃絶のメッセージが次世代にも伝われば、との願いからだった。「相国寺山内にある虚白院には、被爆したクスノキから生まれた観音さんもあります。原爆写真展なんかもやりました。ブータンはワンチュクさんのお父さんの代からのおつきあい、日本がまねせなあかんことが多いですな。みんなよく歩いているんです。すごく健康そうで。決して豊かではないのに笑顔がよろしい。人間本来の幸せがありますよ」

せっかくだから見ていってくださいよ、と促され、境内の承天閣美術館で開かれていた森田りえ子展をのぞいた。金閣寺方丈の杉戸絵を担当した日本画家らしい。花ショウブなど四季折々の花が繊細かつ大胆な筆致で描かれ、サブタイトルは「いのち賛歌」とある。「ワンチュク国王は、仏教の力で争いをなくさねばとおっしゃったんです。感銘を受けました。仏教の教えの基本は、山川草木悉皆成仏（さんせんそうもくしつかいじょうぶつ）です。この世に存在するすべて、草も木も石ころにも、仏さまの命が宿っている。これが原点です。だから戦争はしたらあかん。仏さんと仏さんが殺し合いしていいはずがないやないで

すか。命を輝かす一。森田さんの絵にはその思いがこもってますわ」

ちっとも年齢を感じさせないつやつやの顔である。「ブンちゃんがなあ……。ぽつんとつぶやいた。「2年前に亡くなった俳優の菅原文太さんです。ブンちゃん、私と同年でね、よく飲みました。沖縄からやってきてうちで講演してもらいました。平和の大切さを語ってくれまして」。老師のお体は？

「暮れに大腸がんの手術をしましたが、もうビールのジョッキも空けられますから。まだまだ戦争体験者は死んでられんですわ」【鈴木琢磨】

■人物略歴

ありま・らいてい

1933年生まれ。8歳の時、大分県日田市の岳林寺で得度。京都仏教会理事長。「宗教者九条の和」の呼びかけ人の一人。著書に「禅僧が往く」「臨濟録」を読む」など多数。

特集ワイド

この国はどこへ行こうとしているのか 試練の憲法

ノンフィクション作家・澤地久枝さん

毎日新聞 2016年6月16日

後戻りする最後の機会

毎月3日午後1時、国会正門前に立つ、と決めている。

3度の大手術を受け、ペースメーカーを埋め込まれた心臓。数年前に脳梗塞（こうそく）に倒れた体。それでもノンフィクション作家、澤地久枝さん（85）は国会前へ行く。「アベ政治を許さない」と俳人、金子兜太（とうた）さん（96）に揮毫（きごう）してもらったポスターを両手で掲げるために。

澤地さんらの呼びかけで、国会前に約5000人（主催者発表）が集まってポスターを一斉に掲げたのは昨年7月。1回きりの行動のはずが、11月3日に再開。それ以来、毎月1回定刻にポスターを掲げる全国一斉行動へと発展した。

「安倍政治を許さない！」とシュプレヒコールが響く中、澤地さんは一人黙ってポスターを掲げる。「デモやシュプレヒコールが苦手なの。でも私のように、憲法は守りたいけれど大勢の人と何かをしたり、大声で叫んだりするのが苦手という人は多いと思う。そんな彼らが顔を上げてくれたら、この国の政治は変わると思って」。だから、黙ってできる、一人でもできる「一斉行動」を思いついたのだ。

参院選は「一人一人の勇気が問われる」と考えている。意思を表明する勇気だ。「安倍政権は『憲法改正』を争点から隠していますが、改憲勢力で3分の2の議席を獲得すれば必ず改憲に動き出します。声を上げなきゃ、この国のかたちは変わってしまう」。それから小さく息を継ぎ、私の顔を見据え、きっぱりと言った。「今が、後戻りをする最後のチャンスなんです」

自宅で出迎えてくれた澤地さんはラフなシャツ姿。澤地さんといえば、つむぎの着物と思っていたのに。「今日は時間がなくて」。聞けば、病院でのリハビリ直後で、ぐったりと疲れている身なのに、他ならぬ憲法の取材だからと、無理に時間を空けてくれたようだった

た。

平和憲法を守ろうと2004年に設立された「九条の会」の呼びかけ人の一人。しかし『9条を守れ』で済む時代は終わった。考えを変えました」と言う。

「憲法全体を守れ、と言わなければいけない時代になってしまいました。今、危ういのは9条だけではありません」

例えば25条。〈すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する〉。現実には「貧困率は高まるばかり。特に子どもの貧困は深刻です」と顔を曇らせる。

26条もそう。〈すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する〉。でも、「経済的な理由で大学や高校に子どもを進学させられない親が大勢いる。奨学金という名の教育ローンを利用して大学に行けば、卒業時には何百万円もの借金を抱えてしまう。欧州では高等教育は無償の国も多いのに」。

澤地さんの目には「憲法の一つ一つの条文が政治によって裏切られている」と映る。

それなのに国政選挙の投票率は相変わらず低い。「社会不安が高まり、経済基盤が揺らげば揺らぐほど、人々は権力に近づこうと批判的な精神を失ってしまうものなのです。かつての日本もそうやって、あの戦争に突入しました」

ならば今も？ 「ええ。似ています。ただ、あの頃は『満蒙は日本の生命線』なんてスローガンがあり、他国に出て行けば生活が豊かになり、新しい仕事を得られるという幻想がありました。今は違う。あるのは『今よりひどくなりたくない』という思いだけ」

だから「美しい国」という“幻想”に人はひきつけられるのだろうか。

昭和や戦争をテーマに、膨大な資料をひもとき、歴史から忘れられかけた無名の人々の生きざまを書き続けてきた。そんな澤地さんが昨年、「14歳 フォーティーン」を書いた。中国東北部の旧満州で、14歳で敗戦を迎えた自身の体験記だ。「かわいがってきた弟の孫が14歳になった時、この子のためにきちんと書き残そうと思ったの」

おなががすいていても「欲しがりません勝つまでは」と信じ、子ども茶わん1膳しか食べないと自分に課すような熱心な「軍国少女」だったこと。長くふたをしてきた記憶一ソ連兵にサーベルを胸元に突きつけられ、あやうくレイプされそうになったことも。主語を一人称ではなく「少女は」とすることで、ようやく書き切ることができた。

若い世代に体験を語り継ぐことは難しい。「読んだ？」と尋ねても、弟の孫は首を振る。今も憲法の話ができずにいる。それでも、「14歳」を書いたことは無駄ではないと信じている。

若い人に伝えたい。ミッドウェー海戦で犠牲になった日本人3057人と米国人362人の全戦没者を特定した時、知った事実を。「アメリカには親子2代で戦死した家族がいた。ミッドウェーで亡くなった人の息子がベトナム戦争で戦死していたんです。一方、日本ではミッドウェーの犠牲者の子どもは誰一人戦死していません。憲法9条があったからです。今後、自衛隊員に犠牲者が出てから後悔してももう遅いです」

「押し付け憲法」論は根強いが、憲法の生まれた時代を知ってほしいと願う。「日本の主要な都市が空襲で隅々まで焼かれ、誰もが戦争だけは嫌だと腹の底から思っていた。そんなすさまじい状況下でこの憲法は生まれました。だから皆、不戦の誓いを歓迎したんです。ただの『押し付け』じゃない。うそと思うなら当時を知る人に聞いてみればいい」

しかし「当時を知る人」は年々減っている。9人いた「九条の会」の呼びかけ人も近年、井上ひさしさん、鶴見俊輔さんらが鬼籍に入り、今はもう澤地さんと哲学者の梅原猛さん（91）、作家の大江健三郎さん（81）の3人が残るだけだ。

澤地さんは今月、「九条の会」の呼びかけ人では最初の07年に亡くなった作家、小田実さん（享年75）の石碑の除幕式に立ち会った。刻まれていた言葉は「古今東西 人間みなチョコチョコボヤ」。小田さんが好んで使った言葉だ。

「チョボチョボでいいと思うんです。えらい人が一人で何かやるより、えらくないチョボチョボの人が皆で頑張る方がずっと価値があるから」と澤地さん。一人暮らしの中で、お風呂に入る度に「このまま死ぬかも」と思うことがある。「記憶力の衰えも。こうしてお話ししていることだって、明日全部覚えていられるかしら」と笑う。「でもチョボチョボがやらないとね」

だから勇気を振り絞り、考えを言葉にし、書き、話す。メッセージを掲げ、呼びかける。

「不思議なくらい、憲法のこととなるとまだ体が動くんです。憲法は私が生きてきたことそのものだから。私の言論も暮らしも全部、憲法が守ってくれたと肌身に感じているから」

澤地さんの勇気の根っこは、憲法にある。【小国綾子】

■人物略歴

さわち・ひさえ

1930年生まれ。4歳で旧満州（中国東北部）に渡り、そこで終戦を迎える。「妻たちの二・二六事件」「滄海（うみ）よ眠れミッドウェー海戦の生と死」（86年菊池寛賞）など著書多数。2008年度朝日賞。

特集ワイド

この国はどこへ行こうとしているのか 試練の 憲法 映画監督・松井久子さん

毎日新聞 2016年6月14日

不思議なクニの無関心

夕日が映る国会議事堂前を、映画監督の松井久子さんと訪れた。この場へ足を運ぶのは「あの日」以来のことだという。昨年9月19日。安全保障関連法が成立した日だ。「憲法守れ！」「戦争反対！」。ここで大勢の人々が汗だくになって反対の声を張り上げた。その熱気を「憲法の未来」というタイトルのドキュメンタリー映画に残そうと、集会を撮影していた。

「あの日、胸にわき起こった無力感を思い出しました」。松井さんは、国会議事堂に背を向け、こうつぶやいた。

無力感一。「有権者の6割以上が反対し、国会前でこれだけ大勢の人たちが反対を訴えても、国会では安保関連法賛成議員が数の上で圧倒的優位です。与党議員たちは『ああ、外が騒がしいな』くらいにしか思っていないのか、と感じました。本来は国民があるじで、国民のために議員は仕事をしているはずなのに。その落差、主客転倒した現実にも無力感というか、理不尽さを覚えたのです」

先月劇場公開されたこの映画は、作家の瀬戸内寂聴さんや憲法学者の長谷部恭男さんといった著名人だけでなく、憲法を生活に生かそうとする人々を追った。貧困を理由に志望校進学が危うくなる高校生、街の中で居場所を求める身体障害者……。生活者としての苦

悩や絶望がすべて政治、そして憲法につながっている。松井さんは撮影を通じて、憲法は私たちが考えている以上に暮らしの中で意味を持つことに気付いた。「理屈じゃなくて心からの叫び、肌感覚の憲法観でした。だから、説得力があって共感できたんです」

映画の中で出てくる一場面。安保関連法反対デモを呼びかけた19歳のフリーター（当時）、高塚愛鳥（まお）さんが、茶髪にくっきりメイク姿で声を上げた。「ギャルって政治のことを考えちゃダメなんですか？ 憲法があるから私らしくいられて……この私の日常を壊されたくない！」

石川県在住の主婦、水野スウさんが「12条する」という動詞を日常会話で使うことを呼びかけ、他の主婦たちが勇気づけられる姿も描かれている。12条には「この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によって、これを保持しなければならぬ」とある。自宅で憲法の勉強会を続け、「わたしとあなたの・けんぼうBOOK」という本を書いた水野さんは「不断の努力を普段から、ですよ」と肩肘を張らずに「12条する」のが大切だと話す。

あの日わき起こった無力感がゼロになったわけではない。だがインタビューを重ねる中で「憲法には、私たちはどう生きるべきかが書いてある」と希望を見いだせるようになった。

1998年に52歳で念願の映画監督デビューを果たすまでは、男社会の中で「ジェンダーをもっと訴えたい自分を押し殺して」生きてきた。雑誌の編集者やライター、俳優のマネジャー、テレビ番組のプロデューサーとキャリアを積みながら、社会に問題提起する自分らしい方法は何か模索した。

松井さんが早稲田大へ入学したのは65年。米軍が北ベトナムを空爆し、日本でも平和を求める学生デモが広がった頃だ。松井さんも国会前でジュラルミン製の盾を構えた機動隊と対峙（たいじ）した。ただ、思い起こせば、「みんな行くから」という理由で参加しただけ。リーダー格の学生の演説は「どこかの本に書いてあるのをなぞったような」無味乾燥のものに思えた。「あの時代の学生運動の失敗が、国民の政治離れの歴史的な起点になったのでは」。そんな思いから、映画監督としては、振りかざした正義ではなく、生活感覚を大切にしたいと考えている。

監督第1作は、認知症を患う在米日本人妻を描いた「ユキエ」（98年）。第2作の「折り梅」（2002年）では、認知症の高齢者と向き合う家族の姿を社会問題として世に問いかけた。2作とも比較的地味と思われるテーマだが、全国で自主上映の動きが広がり、観客は延べ200万人を超えた。劇場でのヒットがなくても多くの人々が応えてくれる自主上映というやり方に手応えを感じていた。

これまで映画製作費用は、映画の趣旨に賛同する全国各地のサポーターが出資してきた。今回も同様に「今こそ憲法の映画が必要」と訴えたが、資金集めは予想以上に苦労した。熱心に支援してくれたサポーターの一部から「憲法のような政治的なテーマだと遠慮させていただきたい」という声が出たのだ。

「一体なぜ、萎縮……、いや、自粛のムードがここまで広がっているのでしょうか」。自

肅という言葉を選び直した後、語気が強まった。「私たちの憲法がないがしろにされようとしているのに、なぜ自分のこととして考えることをしないの？」

製作過程で、映画のタイトルを「不思議なクニの憲法」に変えた。憲法の未来より、「国民の憲法が危機なのに無関心が広がる不思議な今」を国民一人一人に問いかけたかったからだ。安保関連法を成立させた政権与党を「強行だ」と批判するのはたやすい。だが、彼らに政権を与えたのは、私たち国民ではないか。映画を通じてこの点を再認識できればと考える。

6月上旬に岡山県内で開かれた「不思議なクニ」の上映会。主催は地元の中小企業経営者で作る団体で、どちらかといえば現政権の政策や改憲の方向性に賛同する人が多いと事前に耳にしていた。普段は護憲派の女性グループの会合に呼ばれることが多い松井さんにとって、初めての体験だった。上映と講演後の質疑応答で、自民党の地方議員だという男性が挙手した。「本当に勉強になりました。考えさせられました」。批判されると思ったら謝意の言葉だった。「映画に出演した人々の身近な憲法への思いが、立場が異なる人たちにも何かを伝えられたのでは」。思いがけない男性の言葉に、感情的な憲法論争を乗り越える可能性を感じた。

松井さんは、現行憲法を絶対に守れと主張しているわけではない。性的マイノリティーや、在日外国人の人権を擁護する明文規定はないため、その部分を補うことは必要かもしれないと考えている。「改憲、護憲の立場に関係なく、この映画を見て、立憲主義や人権の大切さが自分の問題だと気づいてほしい」

参院選（7月10日投開票）が近づいている。安倍晋三首相は街頭演説などで「アベノミクスを加速するかが争点」と訴えるが、改憲が本音だと考える。「政権与党の狙いに、国民がどんな意思表示をできるか、試されているのだと思います」。「不思議なクニ」の住民の無関心から脱し、どこまで一人一人が「12条する」ことができるか分からない。でも、昨年のような無力感は味わいたくない、と強く願っている。【江畑佳明】



この参院選で改憲勢力が発議に必要な3分の2議席を超えれば、安倍政権は悲願の改憲が可能になる。試練を迎えた憲法に私たちはどう向き合えばいいのか。識者と考える。

熱血！与良政談

シールズに教えられた＝与良正男

毎日新聞 2016年6月22日

一連の安全保障法制に反対するデモをリードした学生団体「SEALDs（シールズ）」の姿を初めて国会周辺で見たのは昨年6月だった。実はその時、私は一種の衝撃を受けたのだ。若者たちはラップ調で、こんな掛け合いをしていた。

「民主主義って何だ？」

「これだ！」

そうなのだ。安保法制で問われたのは、日本の安全保障のあり方だけでなく、そもそも憲法とは何かであり、ひいては民主主義とは何かなのだ。ところが私たち大人は分かったような顔をしながら、民主主義とは何かを近ごろ考えてきただろうか。目が覚める思いだった。本質をストレートに、素直に訴える彼らに私はむしろ教えられたのだった。

あれから1年。今回の参院選で、民進、共産など野党4党の候補が全国32の「1人区」すべてで一歩化されたのは、昨秋来、シールズのメンバーが「野党がばらばらでは困る」と各党に働きかけてきたことを抜きにしては考えられない。

シールズのメンバーたちは若者全体の中では多数派とは言えないだろう。彼ら自身も過大評価されることには戸惑いがあるようだ。参院選後には解散するともいう。

だが、若い彼らや、それに呼応した学者らと野党党首が並んで街頭演説するようになると予想した人は少ないはずだ。

安倍晋三首相は野党統一候補について「混乱を呼ぶだけで無責任だ」と批判し、民進党の岡田克也代表は「政権を倒すという共通目的に基づいて協力するのは全くおかしくない」と反論している。その是非を有権者が判断する選挙でもある。若者たちが大きな争点を作ったと言ってもいい。

先週書いたように安倍首相が「消費増税は延期するから憲法を改正させてほしい」と言っているような参院選だ。首相は「改憲を争点にする必要はない」と言うが、仮に今回、参院でも改憲発議に必要な3分の2の勢力を確保すれば改憲議論に突き進む可能性は大きい。それは民主的な選挙なのか。

強い政権の下で物事をスピーディーに決めていく方がよいのか。時間はかかるが、少数意見も尊重し可能な限り合意を目指すのがよいのか。やはり問われるのは「民主主義って何だ？」である。(専門編集委員)

熱血！与良政談

続「非を認めぬ首相」＝与良正男

毎日新聞 2016年6月8日

先週、消費増税の再延期について「アベノミクスは思い通りに進んでいない」と率直に認めた方がよほど国民は納得するのに、非を認めようとしない安倍晋三首相の姿勢こそが参院選の争点だ――と書いた。「その通りだ」から「再延期はありがたい決断なのに、あなたは批判ばかりしている」まで、賛否両論、たくさんの意見をいただいた。

このコラムを書いたのは首相が記者会見で再延期を正式表明する前である。そして会見を聞いて、私はさらに驚いたのだ。私の見立てをはるかに超えるものだったからだ。

かつて「再延期はない」と断言していた点について、首相が「公約違反との指摘は真摯（しんし）に受け止める」と言いながらも、「これまでの約束とは異なる新しい判断だ」と語ったのはご存じの通りだ。

状況が変われば公約の変更はあって構わないし、公約に縛られて失敗するより、よほどいい。ただし大切なのは変更に至った責任を認め、その理由をきちんと説明することだと従来、私は書いてきた。ところが、アベノミクスは順調だが、世界経済のリスクに備えた「新しい判断だ」とは……。私はこんな強引な弁明が今後、社会で横行するのを恐れる。

首相は再延期について「参院選で信を問う」とも語り、「自民、公明両党で改選議席の過半数」を目標に掲げた。通常「信を問う」は衆院選で使う言葉だ。衆参同日選を見送った以上、参院選で目標を達成できなければ「信を失い、退陣する覚悟」を示したといっている。

だが、目標達成に必要なのは両党で61議席だ。前回の参院選で両党は76議席を獲得しており、現状の世論調査を見れば、実はそんなに高い目標ではない。

一方、首相の最終目標と思われる憲法改正に関して「与党で衆参で3分の2を取ることには不可能だ」とも会見で語り、改憲を選挙で強調しない姿勢をにじませた。ただし、おおさか維新の会など改憲に前向きな勢力を含めれば、参院でも3分の2を占めるのは、まったく不可能ではないという声を政界で聞く。

安保法制を思い出そう。今の政権は選挙戦では意識的に語らず、勝てば一転、「すべて白紙委任された」とばかりに突き進んできた。やはりそうした「安倍政治」そのものが争点なのだ。（専門編集委員）